

1 教育目標

○学校理念〈夢と高い志、挑戦、貢献、そして、未来創造〉 高い志をもって夢を追求し、挑戦する気概をもち、人や社会に貢献する心によって、未来を創造する人材の育成を目指す。 ○育てたい児童像 これからの時代に必要となる能力やスキルは、基礎能力や高度な専門知識だけではなく、根源的な意識や行動面に至る能力・姿勢・意欲が求められる。 このことを踏まえ、利晶学園小学校が育てたい児童像は、以下の４点の能力・姿勢・意欲をもつ者とする。 ・常識や前提にとらわれず、ゼロからイチを生み出す能力 ・多様性を受容し他者と協働する能力 ・夢中を手放さず一つのことを掘り下げていく姿勢 ・グローバルな社会課題を解決する意欲
--

2 中期的目標

1 幅広い進路選択を可能にする確かな学力の養成 2 社会の変化に柔軟に対応できる力の素地の養成（主体性、多様性、協働性、学びに向かう力、人間性等） 3 豊かな心の育成 4 英語教育・国際教育の充実 5 利晶サイエンス・テクノロジー教育の充実・深化 6 支持基盤の確立 7 安定した学校運営
--

3 学校教育の自己診断と学校関係者評価委員会の意見

学校教育自己診断の結果と分析	学校関係者評価委員会からの意見
① 入学 児童募集において、定員 90 名のところ、出願数 107 名（前年度 93 名）入学者数 98 名（前年度 84 名）であった。昨年度は 5 歳児人口の減少の影響を大きく感じる結果となった。しかし、校名変更への塾や保護者に対する丁寧な説明や、ここ 2 年間のインターや幼稚園などへ少人数でも学校長自ら訪問し説明してきた結果が表れてきているように感じている。南大阪の他校の現状や人口推移を見る限り、今後、質を担保しながらの安定した定員充足のためには、更なる努力が必要だと強く感じている。 ② 進学 中学進学において、内部進学者 42 名（前年度 35 名）内部進学率 48.3%（前年度 43.8%）と 4 年連続の上昇である。高校入試の無償化に伴う私立中学志望者の増加の影響と立命館大学への接続が後押ししてくれていると思われる。更に、昨年度と比べるとやや学力的には課題があると思われた学年だったが、灘 1 名・東大寺 4 名・大阪星光 5 名・四天王寺 3 名・神戸女学院 2 名・清風南海 19 名と予想を上回る健闘を見せた。 今後、内部進学 50%と難関校の合格を更に増やすことが、入学にも大きく影響することを踏まえた指導の徹底を図る。 ③ 国際教育 昨年度から「英語教育」を「国際教育」の支柱と位置づけ真のグローバルリズムを身に付けさせる取り組みと社会とのつながりで受ける刺激のシャワーで、学力以外の人間力の育成を目指した企画が徐々に整ってきている。 ④ 保護者評価 保護者アンケートを 12 月に実施。全 31 項目全てが、肯定的評価 85%以上となっている。昨年度との比較でダウンは 8 項目、「わが子は、学校の決まりを守っている」が、最大マイナス 3 ポイントとなった。 次年度に向けて、生活指導の強化を図る方策を既にとっている。	①委員会の体制 地域代表者（登美丘南校区自治連合会会長） 保護者代表（保護者会会長） 学識経験者（大学講師） 校長・教頭・事務長 ②委員会の実施日 第 1 回 2025 年 6 月 11 日（水） 第 2 回 2026 年 3 月 19 日（木） ③自己評価の結果に対する評価 ・先が読みにくい世の中になってきている。だからこそ、子どもが「元気で、逞しく、しなやか」であってほしい。そういう観点から、様々な人との交流の機会が多いのは評価できる。学校、学校長の信念をしっかりと打ち出すことが成果につながる。 ・多角的に改善できていると評価する。IT の発展で、子どもの集中力の続く時間が短くなっている。かつ、打たれ弱い子が増えている。文章が書けない子どもも増えている。それに対応できる教育をしてほしい。 ・「例年通り」に固執してはいけないと沖縄の修学旅行の事故で感じた。現状を見極めて、安全第一を望む。 卒業式で校歌の歌詞の 2 番を校長先生の配慮で「はつしば学園小学校」と指示で歌わせてくれた時、驚きと感動を強く感じた。先生方の工夫次第で感動が生まれる。是非頑張ってほしい。

4 本年度の取り組み

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価	次年度に向けての改善策
1 幅広い進路選択を可能にする確かな学力の養成	(1) 学力推移データ等に基づく現状分析と課題の整理	・到達度テストの学年別現状分析・課題整理と継続検証 ・改善内容の整理、計画をした上での実施	・内部進学率及び難関中学校の合格実績の向上	・本校独自の到達度テストを例年通り 2 回実施。結果を分析し指導に活かした ・外部難関中学への合格者 34 名（前年度 43 名）とやや減に転じたものの系列校への進学率は、48.3%と前年 43.8%から大きく上昇した	・到達度テストと校内研修は、継続実施
	(2) 授業内容の改善・充実	・6 回の校内研修の実施 ・教科研究のもと新任研修を実施、教員の授業レベル向上を図る	・実施計画通りの校内研の実施	・各学期に 2 回、年 6 回の校内研修を実施 ・新任者は研究授業を実施し、授業力向上に努めた	
	(3) 進路指導体制の再編	・習熟度別学習（高学年）の課題整理 ・算数、国語の習熟度別授業の実施と効果的指導の検証	・高学年で習熟度別授業を実践、その効果を検証する。その上で授業改善	・6 年の習熟度別授業を国語（5 分割）算数（6 分割）で実施し、特に後半は、受験校別対策を行い、	・習熟度別授業は、6 年生は、例年通り、5 年生は、開

		・教科による学習到達度を明確にし、授業を充実し個々の学力向上を図る	に活かす	一定の効果があつた ・5年でも短縮授業中は5分割、2月からは6分割での習熟度別授業を週3回実施した	始時期の統一を図るため、シラバスの精査をする
	(4) 内部中学校と連携した学力検証の仕組みづくり	・内部中学校のプレテストや入試問題の研究 ・保護者への周知	・プレテストの積極的受験や入試対策の充実	・6年10月から内部中学校のプレテスト対策を実施。今年度受験者は利大立47名（前年48名）初富41名（前年42名）となった。内部専願増で難関校へのチャレンジが減り課題を残した	・次年度は内部進学50%を目指し、積極的に内部受験を促し、対策を行う
2 社会の変化に柔軟に対応できる力の素地養成	(1) 「グループ・ペア学習」の深化	・学年研、教科研の計画実施	・「グループ・ペア学習」が実践できたか	・教科や学年でグループ・ペア学習に取り組んだ。授業で使用する応用的投げ込み教材（ジャンプ）を教科・学年で研究した ・グループ・ペア学習の目的と効果を改めて明確にし、学校全体で取り組めた	・新しく赴任した教員にも研修を通して方法と意義を伝える
	(2) 宿泊体験学習の充実	・宿泊活動実施後の検証・改善 ・各学年で実施する宿泊活動の内容を検証し次年度へ繋げる	・学校評価アンケートの満足度が上昇したか	・1年生 本校（7月） ・2年生 信貴山（10月） ・3年生 多武峰（10月） ・4年生 林間鉢伏高原（7月） ・5年生 English immersion camp 滋賀（10月） 修学旅行 AUS（2月） ・6年生 卒業旅行 ハチ北高原（2月） 以上で、宿泊学習を実施した ・保護者アンケート「運動会や宿泊行事など、学校行事は楽しく充実している」は、肯定的が93%（前年度92%）、児童アンケート94%（前年度94%）と良い結果が出ている。 ・5年生は2度目の AUS ケアンズ（5泊6日）の修学旅行を実施。ミッション遂行型旅行として他に類を見ない上に、より充実した内容となった	・ようやく方向性時期について精査固定が叶ったので、内容の充実を図りたい ・卒業旅行は学年企画となっているが今後学校として実施
中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価	次年度に向けての改善策
3 豊かな心の育成	(1) 基本的な生活習慣の育成、夢や目標の実現のために必要な力（自己統制力）の育成	・グループ・ペアを基盤とした学級集団の育成 ・道徳部会と連携して思いやりの心の育成 ・自問清掃の見直しと振り返りの実施	・計画通りに実施できたか ・道徳ノートの記入で心の変容をみることができたか	・評価の在り方までは検討できず、優れた道徳授業実践の共有発展にも至らず課題を残すことになった。 ・昨年のハンガリーからの自問清掃の視察団を迎え、その意義と深化の余地を確認できた	・利晶道徳の形態化を目指した活動の強化
	(2) 児童支援体制の整備	・1カ月2回から6回へ、2024年度からSCを1人から2人へ教育相談体制の充実 ・1カ月1回のサポート会議を軸とした教員間の情報共有 ・スクールカウンセラーと連携し、学校・保護者との共通理解を図る ・学校の取組みを保護者へ周知する ・いじめ対策の見直しと改善	・学校評価(保護者)アンケートの満足度上昇 ・学校評価の保護者への公開 ・教育相談、サポート会議等が計画通りに実施できたか ・いじめの早期発見・解決を可能にできたか	・保護者アンケート「豊かな心の育成をめざした取り組みを進めている。」は88%（前年度86%）今年度からの項目「いじめやトラブルに真摯に対応してくれている」は90%、「相談の体制が整っている」93%（前年度91%） ・3月情報公開の実施 ・計画通り実施。生活アンケートを毎月実施し、サポート会議において教員間で内容を確認・共有している ・今年度も重大案件として扱う事例はなく、丁寧な対策を講じてきた。保護者の評価も高く、一定の結果を出せた	・良い面は踏襲し更なる向上を目指す ・肯定的評価の割合が高くまた上昇傾向にあるので継続維持 ・教育相談へよりスムーズにつなげるため、SCによる保護者へのお便りの発行を継続実施 ・問題発生時の組織的対応を、より確実に行うため生活指導部長を2名に増員

4 英語教育・国際教育の充実	(1) 英語教科化を踏まえた指導目標・学習内容の体系化	・4技能をバランスよく育成 ・各学年の指導目標の明確化と目標達成のためのカリキュラム作成 ・フォニックスを使用したライティングとリーディングの指導の強化	・英語4技能をバランスよく育成できたか ・学校評価(保護者)アンケートの満足度上昇	・4技能テストを継続して実施 フォニックスの導入で下位層のスプリングと発音の改善に効果がみられた ・「英語教育」の肯定的評価89% (前年度87%) 「国際教育」に対しては90% (前年度88%) と高い満足度を示している	・world week の内容の充実やイメージョンキャンプの内容の見直しなど、更に英語に触れる機会を増やす
	(2) 授業の充実	・「GrapeSEED」の実践とその効果検証 ・ネイティブ講師と日本人英語教員との連携による授業の実践充実 ・主教材を軸として学齢の興味に沿った教材の選定と実践 ・「Weblio」教材による個別最適化とAIライティングの導入2年目 ・校内レシテーションコンテストを4年5年6年の全員参加で実施	・「授業評価アンケート」の満足度上昇 ・「Weblio」を最適な方法で使用できたか ・外部コンテストにつなげることができたか	・「GrapeSEED」採用後8年を経過し、今後の展開を検討した ・3年生までは同時展開で、英語の教員以外も授業に参加し、学校として英語教育に取り組むことが推進できた ・日本人教員が主に担当するという変更で、機器のトラブルに対する対応が早まり、学習がスムーズになった ・新たな大会としてキンダーキッズ主催の全国大会に参加した	・2026年度から4年の「GrapeSEED」使用を中止 English codeに移行 ・引き続き朝のモジュールでの実施で教員で取り組むAI英会話の導入
	(3) 上位層を伸ばす仕組み作り	・1年2年3年での習熟度別授業の実践 ・英語によるプレゼンテーション活動の充実 ・インタークラスでは発展的内容を盛り込んで児童の意欲を伸長する ・レシテーションコンテストの優秀者で外部から審査員を招いて校内大会を実施	・習熟度にあった授業づくりができていたか ・英語プレゼンテーション活動は計画通りできたか ・活動に工夫を加え充実が図れたか	・1年～3年の習熟度は円滑に行えた ・例年通りの実施ができた ・活動に関しては、安定的にできている ・外部審査員を迎え、実施できた	・習熟度別授業を全学年で拡大実施
	(4) 英語力の検証システムの構築	・英検受験のための計画と受験対策 ・学年で保持級の把握と、3年以上の学年目標数値達成のための働きかけ ・英検受験の上位級(3級以上)取得者の増加を目指し、日本人教員によるReading Writingの強化 ・英検準2級以上取得者の掲示による見える化で児童のモチベーションアップを図る	・児童の英検級を把握し、上位級への挑戦へ誘導できたか ・英検の取得率上昇並びに上位級取得者が増加したか ・3年以上の英検合格者目標に到達したか	・英検上位級受験者へ個別指導をはじめ、準1級合格者を出すことができた ・取得率(3年以上)88.1% (前年度77.4%)、上位取得者(全学年)98名(前年度98名)3年4年5年は目標達成6年は未達。受験との両立に課題が残った。上位層の顕著な増加はみられた。中位層の伸長に課題が残った	・英語科と担任団が連携しての目標達成の意識強化 ・内部進学基準として5級必達となったため4年からのクラス分けは英検を基準とし、1学年5展開とする
	(5) グローバル人材を育成するための日本文化への理解と体得	・お箏体験(3年～6年)の実施 ・華道体験(3年4年)の実施 ・茶道体験(1年2年)の実施	・日本文化に対する理解が深まったか ・体験から得る興味や喜びを感じられたか	・低学年から日本文化に触れる機会があったことは、保護者の高評価(「国際教育」肯定評価90%)につながった	
中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価	次年度に向けての改善策
5 利晶小サイエンス・テクノロジー教育の充実・深化	(1) 理科に関心を持つ心の育成	・利晶サイエンスの見直し ・理科担当教員の授業力向上(体験的活動の重視と積極的研修) ・中学受験に対応した学習支援 ・到達度テストにおける平均点向上 ・学校評価アンケートの上昇	・「科学する心」を育むを目標に6年間を見通したカリキュラムを構築することができたか ・月1回以上の積極的な研修ができたか ・カリキュラムに沿った授業ができたか ・到達度テストの得点力向上ができたか(3・4年80点以上)(5・6年70点以上) ・アンケート結果が向上したか(満足度91%以上)	・カリキュラムの構築と共有はできた ・年9回の教科部会を持ち、特に新人教員の授業力向上に努めた ・到達度テストは3年77.5(前年88.7)、4年69(前年度67.8)、5年69.7(前年度77)点、6年67.8(前年度53.2)とばらつきがある。学年ごとの取り組み方を再度確認する必要がある	- 理科を担当する教員の育成を目指す ・テストの位置づけを確認した上で、6年の目標点は中学入試を考慮したものに再設定をする
	(2) プログラミング学習の実践	・プログラミング教育実施に向けての実践と研修及び内容検討 ・ICT環境の整備 ・次年度以降の実践に向けた準備と研修	・プログラミング教育の実践方針が策定できたか	・3年以上の総合学習でグルーヴノーツとの連携の上、様々なプログラムに取り組んだ ・保護者アンケート「ICT機器を活用した効果的な授業を進めている」の肯定的評価は91%(前年88%)、ここ5年で1番に高い評価を得た	・技術と共にリテラシー教育の必要性がある

中期的 目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価	次年度に向けての 改善策
6 支持基盤の確立	(1)「はたちの集い」の継続 ※18歳成人を受けて、名称を「成人の集い」から「はたちの集い」へ変更	・10期生「はたちの集い」の開催と参加率の水準の維持 ・卒業後の進路把握	・「はたちの集い」を実施し、参加者との懇親の中で、現在の本校への協力を要請できたか	1月5日本校ホールその後、ホテルでの集いに52名（卒業生の59%・前年度75.4%）が参加	・近況や進路の把握に有効なので、継続実施
	(2)卒業生への連携強化	・卒業生交流サイトの構築と活用検討 ・卒業生の進学並びに進学後の追跡調査 ・20周年を終え、同窓会設立から活動の具体化と充実を図る	・卒業生交流サイトは構築できたか ・卒業生の進学先並びに追跡調査はできたか ・同窓会設立後の具体的な活動の立案実施ができたか	・同窓会を通じ「公式LINE」でのアプリ登録の推進を継続中 ・卒業中学校高等学校の調査依頼をし、地道な把握に努めた ・同窓会「成葉会」の第1回総会を2025年10月4日に実施した同窓会発足記念として、桜の木が寄贈植樹された ・卒業証書ファイルを寄贈して頂いた	・各期ごとに幹事を設定し、そこからつなげる作戦遂行中 ・既卒生の登録者数増加並びに会費納入を推進する施策を検討する
	(3)保護者会との教育連携と支援体制の強化	・保護者会との教育連携強化の計画実施 (運動会・ペットボトルロケット作成と発射体験や味噌作り体験等)	・保護者会と教員とが連携して行事ができたか	・若葉会行事は、予定通り実施できた ・グランドピアノ寄贈申し出があり、6号館ホールのグランドピアノと交換するためもらい受けた	・今後も寄付や物品贈与も呼びかけていく ・教育拡充基金の掲示板の設置
7 安定した学校運営	(1)募集定員の確保	・訪問地域、訪問幼児教室等の拡大 ・従来の関係園や幼児塾へ丁寧な継続的訪問や本校での行事の提案や新たな働きかけ ・(大阪チャレンジ) 大和川以北大阪市内のへ積極的訪問での新規開拓と本校の周知と大阪での教育講演会や子育てサロンの実施 ・地元、堺をはじめ大阪南部への募集活動強化を意識 ・募集活動の前倒し ・(インターナショナルスクールローラー作戦) 従来関係のあるインターを含め、新規のインターへの果敢な訪問の実施 ・新規提携園の開拓 ・広報活動への全教職員の参加意識の向上 ・校内募集関係行事の充実 ・江川校長による「利晶小だより」の活用 ・SNSの積極的な活用 ・利晶学園幼稚園との連携の継続 ・様々な要因で転出した児童を転入生の受け入れで一定数確保し各学年90名を担保する	・重点地域とともに、新規地域への募集活動強化ができたか ・既存の関係のある園や幼児塾と継続性が保てたか、また、新たな働きかけはできたか ・大阪市からの児童入学希望者の増加がみられたか ・地元堺からの児童入学希望者の増加がみられたか ・年度内(3月)の学校説明会の実施ができたか ・新規インターに本校の教育内容の周知ができたか ・利晶学園幼稚園以外の園との連携を進められたか ・校内説明会の内容を工夫し、入学希望者の参加が上昇したか ・インスタグラムの再生回数の増加が見られたか ・利晶学園幼稚園との連携が安定的継続的实施できたか	・学校長と教育顧問で新規開拓に努め、少人数でも「子育てサロン」を24回(前年度20回)行った ・従来から関係のあるところ、新規を含め2027年度入試に向け、初の「塾対象入試説明会」2月19日に実施(32団体40名の参加) ・大阪を意識した募集活動を行った結果、大阪からの出願者18名と前年度11名から大幅増加となった。また地元堺からの出願者は昨年22名と激減したが今年度56名と復調となった。 ・2月の塾説明会を定例とした。 ・インターに17校(昨年23校)の訪問 インターからの出願数は30名(前年度18名)と増加した ・提携までは至らなかったが、様々な連携行事が持てた ・働き方改革のこともあり、実施せず ・学校の様子が分かるものという認識が定着した ・インスタグラムのフォロワー数が300から2年で3172へ飛躍的に増加し、「インスタを見た!」という保護者も増えた ・例年通りの実施(10名の参加と入学) ・2025年度4月転入11名、2学期転入5名計16名の転入生を迎えた。増加の傾向が顕著である。今後、転入の広報にも注力すべきである(2026年4月転入生8名)	・「塾対象」の説明会では好評で、次年度からの実施も検討の必要あり ・大阪からの受験生を増やすと同時に、地元に対しても丁寧な広報を心がける ・2年間の挑戦でインター内の口コミでの広がりを入学者に反映させる ・提携につながるまでのチャレンジを継続する ・専属教員2名をあて更に工夫し、新しい広報ツールとして活用する ・継続的に10名以上の入学者の確保を目指す ・継続校・立命館大学への道筋を強調し、転入生増加を図る